

平成25年度 奈良県指定文化財指定答申一覧

種 別	番号	名 称	員数	所 在 地	所有者	備 考
有形文化財	1	<small>さかもとせんじべっていはくうんそう</small> 阪本仙次別邸白雲荘	5棟	吉野郡吉野町大字吉野山2 289番地の1	(公財) 吉野山保 勝会	建造物
	2	<small>もくぞうやくしによらいざぞう</small> 木造薬師如来坐像 台座に天治元年八月七日の 銘がある	1軀	奈良市大慈仙町550番地	大慈仙町 自治会	彫刻
	3	<small>こんじきんぎんでいりょうがいまんだらず</small> 紺地金銀泥両界曼荼羅図	2幅	高市郡高取町大字壺阪3番 地	南法華寺	絵画
	4	<small>こんどうごこれい</small> 金銅五鈷鈴	1口	桜井市大字初瀬731番地 の1	長谷寺	工芸品
	5	<small>やなぎさわけとうしゆねんろく</small> <small>にっきるい</small> 柳澤家当主年録及び日記類 一、楽只堂年録仮名本 229冊 一、楽只堂年録真名本 219冊 一、福寿堂年録 441冊 一、福寿堂様御年録 13冊 一、幽蘭台年録 154冊 一、幽蘭台様御年録 117冊 一、虚白堂年録 52冊 一、虚白堂様御年録 44冊 一、虚白堂様御年録草案 3冊 一、附記 255冊 一、御附記 235冊 一、松平美濃守日誌 3冊 一、宴遊日記 26冊 一、松鶴日記 9冊	1800冊	大和郡山市城内町2番18 号	(公財) 郡山城史 跡・柳沢 文庫保存 会	歴史資料
	6	<small>だるまじしゆつどせきとう</small> <small>しやりよう</small> 達磨寺出土石塔及び舍利容 器	一括	北葛城郡王寺町本町二丁目 1番40号	達磨寺	考古資料
史 跡	7	<small>だるまじせきとうまいのういこう</small> 達磨寺石塔埋納遺構	1基	北葛城郡王寺町本町二丁目 4607番1の一部	達磨寺	史跡
民俗文化財	8	<small>くろたき</small> <small>たるまるせいまくようぐ</small> 黒滝の樽丸製作用具	103点	吉野郡黒滝村大字栗飯谷1 番地	黒滝村	有形民俗

1 さかもとせんじべっていはくうんそう 阪本仙次別邸白雲荘 5棟（建造物）

所在地 吉野郡吉野町大字吉野山2289番地の1

所有者 公益財団法人 吉野山保勝会

名称・概要

- ・主屋 しゅおく 1棟 木造及び鉄筋コンクリート造、建築面積118.58㎡、平屋建地下1階、入母屋造、
棧瓦及び銅板葺、昭和3年
- ・茶室 ちやしつ 1棟 木造、建築面積27.28㎡、平屋建、入母屋造、銅板葺、昭和3年
- ・寄付 よりのつき 1棟 木造、建築面積10.31㎡、平屋建、切妻造、銅板葺、昭和3年
- ・表門 おもてもん 1棟 木造、間口1.8m、棟門、杉皮葺、両脇塀付属、昭和3年頃
- ・管理棟 かんりとう 1棟 木造、建築面積39.65㎡、平屋建地下2階、入母屋造、棧瓦及び銅板葺、
昭和3年頃

宅地 1,321㎡

阪本仙次別邸白雲荘は、吉野郡龍門村の林業家で吉野鉄道の社長や吉野銀行の頭取を務めた阪本仙次の別荘として建設され、主屋・茶室・寄付・管理棟・表門からなる建築群である。建物は昭和3年頃の建築とみられ、主屋、寄付及び管理棟は社寺建築にも通じた岩崎平太郎が設計し、茶室は近代の関西における茶室設計の第一人者、三代木津宗詮が設計している。

主屋は鉄筋コンクリート造の地階の上に木造平屋が建つ構造で、主室の九畳間を中心とし、六畳間、廊下、玄関で構成される。主室は三方に広縁をめぐらせ建具を全面ガラス戸とし、下屋の軒を深く出すことで、吉野山の景観を取り込む開放的な空間となっている。一方、主屋の南西に建つ茶室は、三畳台目、二畳台目、水屋よりなる。三畳台目はアテ丸太を床柱とし、床框は杉絞丸太を用いて素朴な印象を受ける一方、天井は場所により仕様を違え変化に富んだ構成となっている。茶室の東に庭園をはさんで建つ寄付も、簡素ながら良質な空間を形成し、表門、管理棟も含め敷地全体に別荘の構成要素が良好に残っている。

数寄屋造の中に近代的な意匠を取り入れたこの建物群は、名実ともに近代の関西を代表する2名が競いあった設計にふさわしく、吉野山という立地条件を活かし、県内の近代の住宅系建築の中でも高く評価できる。



2 木造薬師如来坐像^{もくぞうやくしにょらいざぞう}

1 軀（彫刻）

台座に天治元年八月七日の銘がある

所有者 奈良市大慈仙町 大慈仙町自治会^{だいじせんちょうじちかい}

像高 32.7cm 時代 平安時代（天治元年／1124年）

大慈仙町公民館に安置される薬師如来坐像。頭体幹部^{とうたいかんぶ}をヒノキの1材より彫出し、前後に割り矧ぎ^は、内割りのうえ割首^{うちぐわりくび}する。平成22年度に東京芸術大学で行われた保存修理の際に台座に銘文が確認され、本像が天治元年（1124）の製作になり、当初は観音・地藏を伴う三尊の中尊であったことが明らかになった。肉髻^{にくけい}が低く丸顔で、抑揚の少ない体軀に彫りの浅い衣をまとう姿は定朝^{じょうちょう}様を踏襲するが、やや引き締まった顔立ちになるところは12世紀前半の奈良における作風を示すとみられる。本像は付近にあった薬師寺に伝来した像であり、薬師寺はかつて当地に存在した東大寺末寺の大慈仙寺との関係が想定されるが定かでない。1尺余りの小像ながら、東部山間地域に伝来する平安時代後期の基準作品であり、台座の主要部材を備えている点においても価値が高い。



3 ^{こんじきんぎんでいりょうがいまんだらす} 紺地金銀泥両界曼荼羅図 2幅 (絵画)

所有者 高市郡高取町大字壺阪3 南法華寺

(金剛界) 縦159.5cm 横155.3cm

(胎蔵界) 縦159.9cm 横155.3cm 時代 鎌倉時代

^{りょうかいまんだら} 両界曼荼羅は『^{こんごうちょうきょう}金剛頂経』に基づく^{こんごうかい}金剛界曼荼羅と『^{だいにちきょう}大日経』に基づく^{たいぞうかい}胎蔵界曼荼羅からなり、一対で密教の世界観を象徴的にあらわしている。本図は一般的な曼荼羅のように彩色を用いず、^{えぎぬ}紺色に染めた画絹の全面に^{きんでい}金泥で図様を描き、部分的に^{ぎんでい}銀泥を併用して仕上げる。金銀泥で描いた両界曼荼羅の作例は、^{むらさきあやじ}空海在世中の作になる紫綾地の^{じんごじ}神護寺本(高^{たか}雄^{おまんだら}曼荼羅・国宝)や平安時代中期の作と考えられる^{こんあやし}紺綾地の^{こじまでら}子島寺本(子島曼荼羅・国宝)が知られるが、類例はきわめて少ない。両幅の緻密な文様や謹厳な筆致などから鎌倉時代の作と考えられ、保存状態が良好で銀泥が明瞭に見られることは特筆される。本図は全国的にも希少な金銀泥による両界曼荼羅で、奈良盆地を離れた山中の拠点寺院に伝来する遺品としても注目される。



金剛界曼荼羅



胎蔵界曼荼羅

4 ^{こんどうごこれい}金銅五鈷鈴 1口（工芸品）

所有者 桜井市大字初瀬731番地の1 長谷寺

総高 20.8cm 時代 鎌倉時代

^{こんどうれい}金剛鈴は鈴の柄を^{ごこしよ}五鈷杵形にした密教法具。本品は鈴身に^{れいしん}曼荼羅中の諸尊を象徴的に表現した^{さまやぎよう}三昧耶形をあらわす^{ごこさまやれい}五鈷三昧耶鈴。三昧耶形は^{こんどうしよ}宝塔・^{ほうじゆ}金剛杵・^{こんどうかい}宝珠・^{みかいふれんげ}未開敷蓮華・^{かつま}羯磨の5種で、これらは^{しはらみつほさつ}金剛界曼荼羅中の^{ごぶつ}四波羅密菩薩、または^{ごぶつ}金剛界五仏などに比定される。三昧耶鈴は鈴そのものを大日如来に見立て、鈴身には大日如来を除く4体の三昧耶形のみをあらわすのが一般的だが、本品のように鈴身に5種の三昧耶形をあらわすのは珍しい。張りの強い^{わきこ}脇鈷や、ゆるやかに開く鈴身の形、総体を一連で^{ちゆうぞう}鑄造する構造などは古様を示すが、彫りの浅い穏やかな作風などから、製作年代は鎌倉時代と考えられる。観音信仰で著名な長谷寺の真言寺院としての側面を伝えるものであり、全国的にも類例の少ない三昧耶鈴の代表的作例として貴重である。



5 やぎさわけとうしゆねんろく につきるい 柳澤家当主年録及び日記類 1, 800冊（歴史資料）

所有者 大和郡山市城内町2番18号（公財）郡山城史跡・柳沢文庫保存会
時代 江戸時代

郡山藩主、柳澤家歴代当主の公用日記及び私的日記類。公用日記は5代將軍綱吉に仕えた吉保から初代郡山藩主の吉里、2代信鴻、3代保光までの4代分が現存し、各々「年録」と呼ばれる。吉保の「楽只堂年録」は和文体と漢文体の2本が伝わり、先代の記述から吉保が六義園に隠退するまでが記される。吉里の「福寿堂年録」は年録中最も大部かつ詳細で、甲府から郡山への転封を含む36年にわたる治世が記される。その後、信鴻の「幽蘭台年録」、保光の「虚白堂年録」と継承され、以降は信鴻から保泰までの記録をまとめた「附記」が保泰の代を補う。「楽只堂年録」を除く年録類には草稿本が伝わり、正本より多くの記事を伝えることで注目される。私的日記は信鴻の15歳の時より45歳のまでの日記（「松平美濃守日記」）、隠退後の日記（「宴遊日記」）、出家後の日記（「松鶴日記」）の自筆本3種があり、文芸を中心に歌舞伎や観劇の記事などが充実している。

これらの日記類は草稿本も含めてまとめて伝存し、県内に残る近世の記録類としては希有な資料群である。郡山藩の藩政を知る上での基礎資料であるとともに、大名の日常生活がうかがえる貴重な文化史的記録として価値が高い。



楽只堂年録

6 達磨寺出土石塔及び舍利容器（有形文化財（考古資料））

出土地 北葛城郡王寺町本町二丁目1番40号

所在地 北葛城郡王寺町本町二丁目1番40号

所有者 達磨寺

時代 鎌倉時代

点数 石塔 1基、合子 1合、水晶五輪塔 1基、舍利 1粒

石塔及び舍利容器は、達磨寺本堂の地下で検出された基壇状遺構上面の中心に築かれた小石室から出土した。基壇状遺構は、鎌倉時代に達磨寺3号墳を改変して造られている。小石室の内部には石塔が建てられ、塔心には合子が納められていた。合子には水晶五輪塔が納入されており、中には舍利にみたてた石片が封入されていた。

石塔は、凝灰岩製の宝篋印塔である。基礎・塔身・笠の3部材からなり、塔身部の上面には、方孔が穿たれている。合子は、緻密な胎土の土器で、蓋と身からなる。水晶五輪塔は、地・水・火輪と風・空輪の2部材からなる。火輪上部から水輪にかけて円筒状の舍利孔が穿たれ、風輪下に作りだされたほぞで栓をする。舍利は、石英片岩の小片であり、ハート形を呈するが、人工的に加工されたものではない。これらの年代は、石塔、水晶五輪塔の形態から鎌倉時代の製作とするのが妥当である。

石塔及び舍利容器は、土中に置かれた舍利容器を納める石塔という点、さらに正式な発掘調査で出土した点でも、他に例をみないものである。その組み合わせは、当初の姿を保っており、鎌倉時代における舍利信仰の具体像を示す点で極めて貴重である。



石塔



合子



水晶五輪塔

7 達磨寺石塔埋納遺構 1基（史跡）

所在地 北葛城郡王寺町本町二丁目4607番1の一部

所有者 達磨寺

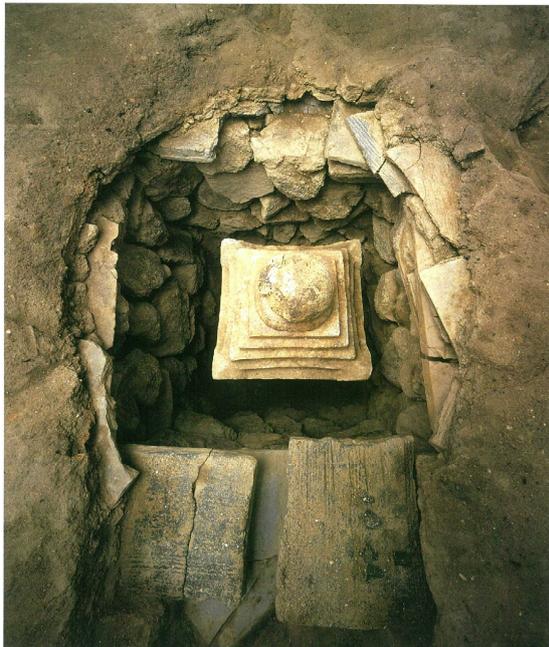
時代 鎌倉時代

達磨寺は、片岡丘陵と葛下川にはさまれた狭小な平地に位置し、聖徳太子が片岡で出会った達磨大師の化身と信じられた飢人を葬った塚と信仰された古墳を中心として造営された寺院である。

本堂の地下で検出された石塔埋納遺構は、鎌倉時代に達磨寺3号墳（直径約16m）を改変して造られた基壇状遺構上面の中心に築かれた小石室である。規模は一辺約50cmの正方形で、深さ約80cmを測る。側壁は20cm前後の花崗岩の自然石を積み、上面に板石を置いて石室を密閉していた。また基壇状遺構の平面は、東西約14m、南北約11.5mを測る方形で、高さは約1.9mである。

小石室の中には、石塔が建てられていた。石塔は宝篋印塔で、塔身には上面から穿たれた方孔があり、合子が納められていた。合子には水晶五輪塔が納入され、中には舍利にみたてた石英片岩小片が封入されていた。埋納品の年代もまた、形態的な特徴から鎌倉時代と考えられる。

片岡の地の古墳時代後期の円墳に聖徳太子伝承が結び付けられ、そこに鎌倉時代に石塔埋納遺構が築造されたことは、中世の聖徳太子や達磨大師信仰の一端を示す。また石塔埋納遺構は、全国に類例がない特異なものであり、中世における舍利信仰の具体像を正式な発掘調査で確認した点で、極めて重要な遺構である。



8 黒滝の樽丸製作用具（有形民俗文化財）

所在地 吉野郡黒滝村大字粟飯谷1 黒滝村民俗資料館（黒滝村旧役場庁舎）

所有者 黒滝村

点数 103点（用具60点、製品・材料24点、仕事着19点）

樽は清酒を入れて貯蔵、運搬するための容器である。その樽材をクレ（樽）といい、これを竹の輪で束ねたものを樽丸という。江戸時代、灘の酒造業の隆盛にともない、樽丸の需要が激増した。吉野地方ではその原材料として、節が無く真っ直ぐで、年輪の細かく素直に通った杉の大径木を生産する技術が発達したといわれている。吉野林業を別名「樽丸林業」と呼ぶ所以である。

吉野における樽丸の発祥は享保年間に和泉国堺の商人が芸州の職人を黒滝村烏住に連れて来て村人に教えたのがそのはじまりであるとされ、その後、川上村をはじめとして吉野全域に広がった。職人はマルシ（丸師）と呼ばれる。賃金は他の山仕事に比べて高額であり、黒滝村ではほとんどの男子は学校を卒業すると弟子入りしたという。職人は吉野郡内だけでなく、クニイキといって、東北や九州など日本全国に出稼ぎした。

本資料は、樽丸発祥の地である黒滝村の職人によって戦後まで実際に使用されていた製作用具、製品・材料、仕事着をコレクションしたものである。サキヤマ、クレヤ、マルマキの分業体制によって生産していた時代における一連の工程を体系的に知ることできる民具資料であり、吉野林業発展の基礎となった黒滝村における樽丸生産を具体的に伝えるものとして日本の民俗技術史においても貴重な一括資料である。なお、平成18年度に「吉野林業と林産加工用具」が国の重要有形民俗文化財、平成19年度に「吉野の樽丸製作技術」が国の重要無形民俗文化財になっていることも本資料の価値を高めている。



